

ません。

どうか二度と戦争を起さないで、世界じゅうの人々が仲よく暮らせるように平和な日本を守って下さい。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 桜井彦寿

一、出生から終戦まで

私は、霊峰富士の山麓、標高千メートルの高原の農村で生まれましたが、父が軍人（陸軍中尉）だったので、非常時日本の防衛に当たるのは日本男子の当然の任務であると厳しく教えられて育ちました。

近くの富士吉田市（元瑞穂村）実業学校を卒業後、昭和十九（一九四四）年二月八日、現役兵として満州国黒河省孫吳第六九四部隊第一中隊（軍野戦砲兵隊）に入隊し、孫吳県勝光屯勝山近くの

山中、孫吳花見山に陣地進入し砲座を構築しました。

昭和二十年八月九日、ソ連軍が日本との不可侵条約を破ってソ満国境を南下したという情報を受け、私どもの部隊も花見山陣地の野戦砲兵隊も応戦態勢を整え、戦車に対しては大砲の射撃はもちろん、肉弾戦も予想し、三人一組一戦車に破甲爆雷を抱えての体当たり攻撃戦に出ることと決死隊を編成して待機していましたが、八月十五日正午、花見山陣地で終戦の詔勅を聞くことになりました。それは、私どもの部隊は関東軍の黒河方面軍の直轄砲兵隊で、当時としてはピカーの九六式超短波無線機を携行しておりましたので、関東軍司令部の命令、情報は直接受領することができました。私は下士官としてその玉音を直接聞いておりましたが、「忍ヒ難キヲ忍ヒ以ッテ万世ノ為ニ大平ヲ開カムト欲ス・・・」との終戦の詔勅に、「まさか日本が負けるとは」と部隊長以下私ども、みんな泣きました。

やがて部隊長は毅然とした軍人に返り、「今日の詔勅は情報として入手しただけである。よって一切を厳秘とする」「やがて関東軍司令官命令として、部隊の処置について正式命令が下るまで我々は今まで通り戦闘を継続する」という厳命である。それどころか、「今日にもソ連軍は戦車部隊を先頭に我々陣地を攻撃するかもしれない。そのときには計画通り戦車肉弾攻撃を敢行して祖国を守ってほしい」とあおり立てていた。私は、終戦を宣言した陛下の玉音の後で部隊長が玉碎しろと言われた勇ましい言葉に、何故か軍隊の指揮、命令の矛盾を感じながらも、「そうだ、まだ私は軍人だ」と思い、子供の頃の軍服姿の親父を思い出したことを今でも覚えています。

それでも幸いなことにその後までソ連軍の陣地進攻はなく、八月二十五日払暁、戦車数十台が私どもの陣地を取り囲み、戦闘もなく即日陣地を出て武装解除、そのまま孫呉の兵舎に収容されました。

二、シベリア収容所の地獄の生活

収容所入りした私どもは毎日なす事なく休んでいたが、九月四日夕方点呼のとき、ソ連収容所長命令で「日本軍は明五日前、東京ダモイ（帰る）だ」と知らされ、徹夜で上等の衣服を着たり、乾パン、米類を靴下に詰め込んだりして、数日間の旅行準備をして翌朝孫呉出発。それから徒歩で一週間も野宿しながら歩かせられ、着いた所は黒河であった。

この頃になると、私どもの部隊でも「おかしいぞ、東京へ帰すなら南チチハルからハルピンに下るべきだが、北上とはシベリア行きか？」と騒ぎ出したが、後の祭り。中には、二、三人の朝鮮出身者が夜中に逃亡を図ったが、みんな射殺されたという話まで聞かされながら、黒河から家畜輸送の有蓋貨車に詰め込まれ、ブラゴエシチェンスク郊外だという原っぱを通り、原始林の真ん中に降ろされました。時はもう粉雪の舞う九月十二日頃でした。

三、チタの郊外で収容所生活

ブラゴエから貨車はさらに北上しチタという街の郊外に降ろされ、野戦用の天幕で露営しながら原始林を伐採し、自力で丸太を積み上げ半地下式のログハウスを造りました。壁は両側から土をこねて張り付け、棟内にはドラム缶半切りのペーチカを据え付けると、室内は二段ベッド式の寝るだけの部屋で、一棟百人が押し込まれてどうにか雨露だけがしのげるという地獄部屋だった。最初は電気もなく、伐採の帰りに枯れ枝を担ぎ松明で明かりをとったが、起きて見ると全員、顔が真っ黒となり、点呼前に雪で顔を洗うのが精いっぱいだった。

私どもの作業部隊は一千人くらいでチタに入り、そのうち一部隊五百人が伐採作業隊として四棟の収容所に入れられ、周囲四隅に高い監視塔を建て、衛兵がマンドリン風の機関小銃を持って見張り、外柵に近づくと容赦なく射殺するという監獄扱いでありました。

チタでの作業はほとんど伐採ばかりでした。二人一組となり一丁の大鋸を二人で調子を合わせて切り倒し丸太として用材を造り、他は薪として積み立て、二人で三立方メートルが一日のノルマでした。私は農家で育ちましたので薪切りは得意でいつも一〇〇パーセント以上働きましたので「ハラショーラポータ（働きの者）」だと褒められたものでした。そのため昭和二十一年一月頃から作業組長（四十人くらいの作業班）となりましたが、いつもノルマは一二〇パーセント以上の成績でした。困ったことは、衣服の支給もなく着のみ着のまま、入浴も一カ月二回をこそこ、真っ黒な体にシラムィがゴソゴソでした。また冬に入ると満州から持って行った糧秣も食い尽くしたので給与も悪くなり、黒パンも定量の半分くらいしか支給されず、元気な者も次第に栄養失調症となり突然死する戦友も多くなり、全く惨めな生活になりました。

四、民主教育と青年行動隊と

昭和二十一年八月頃からシベリアでも収容所ごとに「日本新聞」が配達され、当時のプロレタリア革命とか共産主義とか民主主義教育が始まりました。私どものように天皇陛下の赤子として誇り高い軍人生活をしてきた者にとっては別世界の見聞でしたので驚きましたが、それだけに珍しく、これもいい勉強になると思つて真剣に勉強しました。よかつたことに、私どもの作業隊（ブルガード）は収容所一の働き者の小隊だけに、民主主義運動の実践者ということで民主教育宣教師も私どもには一目置いていたので助かりました。

そんな作業成績を評価されてか、私どもは昭和二十二年夏、チタからハバロフスク第三収容所に約百人の同志とともに転属させられました。そして任務は民主主義運動の展開ということで、作業成績の上がない職場に私どもの作業隊が行つて一緒に働き、工夫と努力によってその職場のノルマの成績を上げるといふ大変な仕事でしたが、

「青年突撃行動隊」とおだてられながら、真剣に働くことの大切さを私自身にしみ込ませたよい体験の日々であつたと今にして思っています。

五、夢の帰国

昭和二十三年五月末頃、私どもハバロフスク第四収容所全員に「東京ダモイ」の命令が出されました。私どもはこれまで何回か「ハラシヨラポータ（働きの者）は早く日本へ帰すぞ」と騙されてきたので、「また嘘か」と思っていたが、翌朝、非常呼集で駅まで行軍、駅でまた家畜貨車に詰め込まれ二日ばかりでナホトカまで移送されました。今度こそ帰れるぞと喜んでみると、ナホトカでは第一から第三までの「共産教育課程」に合格した者でないと帰国させないということで、私どもはそれから三週間も「プロレタリア教育」を受け、「赤旗の歌」や「インターナショナルの歌」などを練習して、「日本革命の戦士としての資格が与えられた」上に帰国が許されたわけでした。

日の丸の旗を掲げた「信濃丸」という大きな輸送船に乗船したとき、これで生きて日本に帰れるぞとみんな男泣きしたものでした。翌朝舞鶴港に上陸、衛生検査を受け、米軍のGHQからソ連收容所の生活を厳しく調べられた後、「一金弍千円也」をもらって汽車で甲府駅まで戦友と一緒、甲府から大月を回って富士山の麓、父母の待つ内野に帰りました。

六、家族への遺言

戦争は絶対にしてはならない。人間皆、助け合
い、平和を愛し、戦争をなくすよう心がけてほし
い。

また、家内揃って頑健で、家じゅう仲よく誠実に暮らすことを望んでいます。

強制抑留者が語り継ぐ労苦

山梨県 湯山 太吾

一、出生から終戦まで

私は、大正六（一九一七）年十一月一日、神山富士の北麓・山梨県南都留郡忍野村内野で出生。村立忍野高等小学校を卒業後、東京麻布電気技師養成所の電気科卒業。昭和十六（一九四一）年九月一日、召集兵として東京赤羽通信隊入隊。直ちに戦時編成技師として満州国牡丹江温春第五二一部隊釘宮隊（無線通信隊本部付技師）に配属勤務することになり九月二十日頃、温春に着任しました。

昭和十七年九月、無線通信班長として任官後、牡丹江省温春において美徳電気株式会社（軍需工場）の工場長として軍用通信器機の製作部門を担当していましたが、昭和二十年八月十五日、天皇